

局所麻酔で患者負担少なく

胸椎内視鏡手術法開発

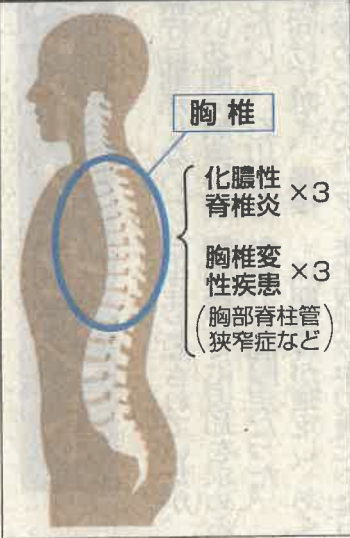


西良浩一教授

徳島大学病院長で整形外科教授の西良浩一医師が、高齢者らに多い胸椎変性疾患の治療法として、体への負担が少ない局所麻酔での内視鏡手術法を開発した。病院によると全国初で、国内トップクラスの腰痛治療で積み重ねてきた手法を胸椎に応用した。全身麻酔を必要としないため、治療対象者が拡大する利点もあるという。

徳大病院長・西良氏 全国初、6例実施

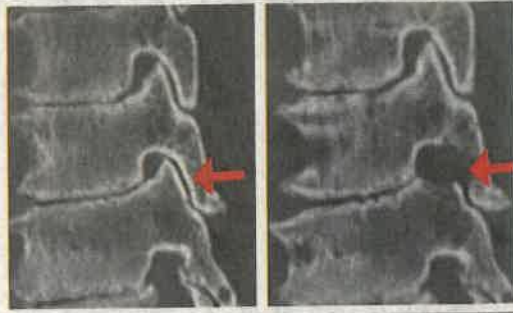
局所麻酔による胸椎内視鏡手術例



治療対象は、加齢に伴う脊椎の変形で筋力低下や排尿などに支障を来す胸椎変性疾患や、脊椎に細菌が感染して背中の痛みや発熱を引き起こす化膿性脊椎炎など。

新しい内視鏡手術は背中の外側を8mm切開し、内視鏡を挿入。モニターで内部を確認しながら、ドリルを使って神経を圧迫している骨や靱帯を取り除く。患者と会話しながら処置できるため、神経損傷のリスクも抑えられる。

西良教授は昨年10月に1例目を成功させ、これまでに阿南医療センター(阿南市)と合わせて6例を実施した。



内視鏡手術前(左)と手術後(右)のCT画像。矢印の神経を圧迫していた骨が摘出された(徳島大学病院提供)

胸部脊柱管狭窄症の90代男性は両足の痛みと歩行障害に悩んでいたが、全身麻酔ができない重症大動脈弁狭窄症のため、従来の手術は受けられなかった。局所麻酔による内視鏡手術を受けたところ、2時間後から歩けるようになり、症状が改善したという。

西良教授らは、椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症といった腰椎の内視鏡手術を昨年までに千例以上積み重ねてきた。脊髄、肺など重要な臓器と近接する胸椎の処置はより繊細な処置が求められるが、腰椎治療で蓄積した経験を応用しながら訓練を重ねて実用化した。

西良教授は「肋骨の間から肺を傷つけずに胸椎の痛みを取り除く内視鏡手術は難易度が高いが、私にとって最後のミッションだった。全身麻酔ができない患者に手術の選択肢を広げることができうれしく思う」と話している。

(山口和也)

徳島新聞令和8年5月29日掲載
コピー、転載禁止